横須賀が受けた空襲
（昭和十七年ドゥーリットル空襲と昭和二十年空母艦載機の空襲）

石川　秀幸

！　焼け野原ではない横須賀の空襲　！

横須賀博物館の学芸員安池尋幸先生から「横須賀の空襲について調べなさい」と言われた。先ず文献資料を探す。『ドゥーリトル日本初空襲』吉田一彦著、三省堂発行。『丸スペシャル』一九八五年二月号。『毎日新聞』『朝日新聞』『読売新聞』の昭和十九年十一月より昭和二十年八月までの写し。『横須賀海軍工廠（こうしょう）外史』。『横須賀海軍航空廠、海軍航空隊の頃を語る座談会』。『横須賀史市』昭和六十三年。『横須賀教育史』等である。

現在の私は七十四歳だが、「ドゥーリトル空襲」の昭和十七年四月十八日は国民学校六年生だった。昭和十九年十一月、サイパン島を発進したＢ―２９爆撃機が、初めて東京に飛来した時は中学二年生だった。都市や軍事工場がＢ―２９の絨毯爆撃で壊滅し、息の根を止められる過程は、昼間は立ち昇る黒煙を、夜はどす黒い赤い炎を幾度も見せつけられた。昭和二十年二月と七月に航空母艦の艦載機が、追浜の海軍航空隊と海軍工廠のある横須賀軍港を襲った。Ｂ―２９の爆弾・焼夷弾は三浦半島には一発も落ちていない。硫黄島から飛来したＰ―５１戦闘機の機銃掃射はなかった。艦載機の機銃掃射を受けたとは聞いている。横須賀三浦の市民の住む地域に、四個の爆弾が艦載機から落とされた。

横須賀地域の空襲についての全体像を記録したものは何もない。実像は断片的にしか判明しない。昭和二十年八月十五日の敗戦の時、私は中学三年生だった。あれから五十九年の歳月が流れた。既に全く忘れてしまったこと、朧げながら頭の隅に残った記憶、また、つい昨日のことのような鮮明な記憶の糸を手繰って、文献資料と突き合わせをした。それと古い中学時代の友人や、先輩や後輩の貴重な証言を戴くことにより出来上がった。この方々に心より御礼を申し上げます。

！　ドゥーリトルの空襲　！

日米開戦から四か月ほど過ぎて、日本中が連戦連勝でいい気持になっていたころだ。昭和十七年（１９４２）四月十八日、東京から千二百キロほどの太平洋上に到達した空母「ホーネット」から、十六機のマーチンＢ―２５陸軍爆撃機が日本に向け発進した。予定ではもっと日本本土に接近したかったのだが、日本海軍の監視船「日東丸」にホーネット艦隊が見つかってしまった。虎の子空母を危険水域からいち速く離脱させるため、予定を変更して早く発艦させたという。曲芸飛行の特技を持つドゥーリトル陸軍中佐が、一番機に乗り込み指揮をした日本初空襲だ。陸軍・海軍の見事な連携プレーの結果が十六機全機を日本に向かわせた。十二機が京浜地区を空襲、一機が横須賀を攻撃、二機が名古屋、一機が神戸を爆撃した。日本側で死者四十五名、重傷者百五十三名、全焼家屋百六十戸の被害という。

Ｂ―２５は双発爆撃機なので、艦載機と違い翼が長いため、飛行甲板の真ん中ではなく艦橋の反対側寄りに滑走目印の白線が見える。また、一・三トンの爆弾を積めたが、五百ポンド（二百二十六キロ）爆弾四個づつ搭載した。航続距離を稼ぐため機関銃を減らし、精密計器も取り外し燃料を余計に積んだ。

日本空襲の後、一機はソ連のウラジオストックに不時着し、残りは中国に不時着した。蒋介石政権下とソ連領に着陸した搭乗員は無事帰国できたが、日本軍支配下に降りた人は捕虜となり三人が処刑された。

日本側では被害は軽微だというが、帝都を空襲した憎らしい敵機を、一機も撃ち落とすことが出来なかったお粗末さは暗い影を落とした。この精神的ダメージは大層大きかったようだ。長い航続距離を持つ陸軍の爆撃機が、海軍の航空母艦から飛び出し日本を空襲するなど、想像もしない日本側だった。

（横須賀上空からの写真のプロジェクターを依頼）

この空襲を記録した日本本土でのアメリカ側の写真は、今お目に懸けた二枚しかないのだ。

米国国立公文書館架蔵の写しを、横須賀博物館の安池先生が買った写真なのである。写真はマーチンＢ―２５に備え付のカメラではなく、横須賀を爆撃した十三番機に搭乗のクレイトン・Ｊ・キャンベルス中尉が撮影した。カメラはリチャード・Ａ・ノブロック中尉の所有という。一枚目の航空写真は海上上空から埋立地方向を写している。四角な特徴的な港は今は既に、埋め立てを広げて無くなった「日の出港」だ。左側上の四角な港は同じく埋め立てで無くなった「安浦港」だ。ともに四角いので重箱と言っていた。二枚目の写真は海軍海兵団の建物と手前の入海、上方に泊町の湾が見える。

この時、四号ドック（現在米軍海軍基地）に入渠改装中の、潜水母艦「大鯨」を狙った爆弾が、ドック側壁と「大鯨」の間に落ちた。Ｂ―２５は低空のまま西へ飛び去ったと書いている。この爆撃機を目撃した証言がある。「あまり低く飛ぶので見上げたら、垂直尾翼が二つで星のマークだった」（友松良雄氏七十五歳）。「若松町で見たよ。海の方向に胴体に描いた星がはっきり判るほど低空だった」（中村勝彦氏七十四歳）。確かにマーチンＢ―２５の垂直尾翼は二枚で胴体と主翼に大きな星のマークがある。更に、事前訓練で超低空飛行を繰り返し行っていたので、実際の爆撃は低空での目視爆撃と符合する（簡略な照準器に換装済み）。これらの証言や残存写真や情報を総合して考えると、東京湾上を「猿島」と「日の出港」の間を通過し、海兵団を眺めて「四号ドック」上空に飛来したことが明らかだ。

！　潜水艦搭載の水上偵察機による米国西海岸空襲　！

面白いエピソードを挿入しよう。『ドゥーリトル日本初空襲』の記事と、『丸スペシャル』昭和五十四年（１９７９）九月号の記事を、二つ合わせた伊２５号潜水艦の作戦行動だ。昭和十七年四月四日、横須賀入港修理とある。四月十八日、米軍機の落とした至近弾（大鯨に落とした別の爆弾）で軽い損傷を受けた。五月十一日、横須賀軍港出港、北米西海岸方面にて行動。六月二十一日タンカー一隻撃沈。六月二十二日アストリアを砲撃。七月十一日横須賀入港。八月十五日横須賀出港。九月九日、オレゴン州森林地帯を艦載機で爆撃。九月二十七日、再度オレゴン州森林爆撃。この間に商船七隻撃沈。十月二十四日横須賀入港、修理。（中略）　昭和十八年（１９４３）九月十六日、消息不明。

！　空母艦載機の海軍航空隊攻撃　！

昭和二十年（１９４５）二月十七日、空母艦載機が関東・静岡の飛行場を波状攻撃した（十八日付朝日新聞）。この日横須賀海軍航空隊（横須賀市追浜町、夏島町）がやられた。「飛行場に雄姿を見せていた大型爆撃機（連山と誇称）は無残な姿に変わっていた」（田口健次郎氏、木村隆男氏、共に七十四歳）。この時、横須賀中学二年生の私たちは、海軍航空技術廠に勤労動員されていた。空襲警報で横穴式防空壕へ逃げ込み、解除で作業に戻り、帰宅の際に目にした光景だった。航空隊の被害の詳細は全く不明だ。帰り際、空襲の為に電車が不通となり線路を歩いて帰った。空腹で冷や汗が出てきたが私一人だけではなく、友達全員が空腹に堪えているのである。食べ物は何処にも売っていない物資欠乏の時代だった。

この空襲で横浜市朝比奈峠付近にあった航空技術廠の分工場で、艦載機からの機銃を受けたとの証言を得ている（有山登氏、桜沢澄男氏、共に七十四歳）。

！　艦載機が横須賀軍港と海軍工廠を攻撃　！

昭和二十年七月十日、空母艦載機の波状攻撃を横須賀軍港・横須賀工廠が受けた。機種はグラマンＦ６Ｆヘルキャット戦闘機と、ボートシコルスキー・コルセア戦闘機と、カーチスＳＢ２Ｃ―１ヘルダイバー爆撃機だとの話である。軍港の小海湾に碇泊中の戦艦「長門」の艦橋に、爆弾が落ち艦長以下三十五名が戦死した。「長門」の脇に碇泊していた特設艦「春日丸」が被弾して爆沈した。駆逐艦「八重桜」も被弾して中破した。工廠の造船部の建物も被弾して停電となった。この頃海軍工廠に勤労動員されていた宮崎康良氏（七十五歳）は、「忘れ得ぬあの日」として語ってくれた。「五号ドック近くの作業現場にいたが逃げ遅れ、激しい空爆に曝され死を覚悟した。敵機が去って気がつくと、碇泊中の艦艇の銃座に血だらけの兵隊さんが、倒れていて既にこと切れていた」と話された。同じ工廠で当日防空壕へ逃げ込んだ日高健二郎氏（七十五歳）の証言である。「横穴防空壕の出入口に爆弾が落ち出られなくなった。横穴壕の真っ暗な

長い距離歩いて、ようやく外に出られた」。

！　艦載機の民間地域への攻撃証言　！

この日の民間への空襲被害は地元の人たちしか知らないことも多い。西浦賀の叶神社裏山「あらし山」の畠に、艦載機が爆弾を落とした。人的被害は無いが宮下町内に相当の泥の雨を降らせた。一見それだけのようだったが、神社の社務所の屋根に大きな穴が開いていた（感見勲氏七十四歳）。商店の瓦屋根を突き抜いて石ころ一個が畳の上に転がっていた（日高健二郎氏七十五歳）。

同日、海軍工廠南側の諏訪公園が被爆した。当時、市立工業学校の生徒だった（島崎良章氏七十五歳）は、「近くの防空壕に避難していた時、激しい振動と轟音に身の縮む思いがした」。「当時、山中町（現横横道路横須賀インター辺）にお住まいの、鈴木千代子さんの弟さんは、艦載機の爆弾が居宅に落ち亡くなられた」（篠田敏明氏七十四歳）

この日、私たちは勤労動員中、北鎌倉の明月院奥の石伐り場跡へ、海軍航空技術廠の旋盤工場を移転させる作業をしていた。帰りの横須賀線は不通で逗子駅から線路を歩いてきた。横須賀駅まで来た時、駅の傍の久里浜へ通じるトンネル入り口の上が被弾し、コンクリートが散乱し架線が垂れ下がっていた。

この日のこと、不発弾の目撃証言がある。「現在の三浦市南下浦町千六十九番地辺りの畠に、艦載機が落した黒い物体が爆発もしないで、その物体の大きさの穴をつくった。穴の跡は消えて判らない。不発弾ではないか」（大井正明氏七十三歳）。

！　『横須賀市史』には　！

『横須賀史市』昭和六十三年（１９８８）発行、五百十一ページ「昭和二十年七月十日の空襲で汐入国民学校の八教室と、学校前の住宅十数戸が被害を受け数人の死者が出た」とある。しかし、同校を昭和十八年三月に卒業した今井真氏・小泉彰氏・成川正夫氏（共に七十四歳）はこの記事を否定された。となると、同誌同ページ「市内の空襲被害は死亡十七名、負傷九十名、全焼・全壊七十二戸、半壊三百三十三戸、三浦半島への空襲回数十五回」と、書かれた数値は軍事施設を含むとして、果たして信頼に値するのか。再検討が必要と思うが。それでは、次に書いた記事の犠牲者は？

！　川崎の軍需工場で動員学徒が犠牲　！

昭和二十年四月四日、川崎の工場で夜間空襲の犠牲者が出た。横須賀市立商業学校（現市立総合高校、当時の校舎は公郷小学校のところ）四年生十二名が死亡、二十名が負傷した痛ましい現実があった。

発表前にひとこと

横須賀の空襲について発表する前に、訂正することが三か所あります。一昨日の毎日新聞の朝刊です。「横須賀空襲」の発表説明の記事です。写真の場所が「海軍工廠」ではなくて「日の出港」「安浦港」の写真です。二つ目は「東京湾の初島からの飛来コース」でなくて、「猿島と日の出港の間を飛んできた」と訂正して下さい。三つ目は私石川を「郷土史家」と書いてありますが、私はこの博物館の安池先生の講座を受けている生徒です。「郷土史家」ではありません。以上三か所の訂正をお願します。

後記

平成十六年（２００４）十一月三日の研究発表会は、従来の倍以上の聴講者だった。安池先生が毎日新聞の記者に話されたので、一日の新聞記事に予告されたためと、先生は満足そうであった。聴講者の反応は手応えがあり、発表して良かったと思った。空襲に関する情報が聞けるのだ。昭和十七年東京空襲では、対空砲火は撃ったが一発も当らない、石黒幸雄氏（七十二歳）の目撃証言の他、多くの事実を伺うことが出来た。

前島先輩と１００１航空隊

西浦賀にお住まいの先輩、前島喜一氏（七十八歳）から「伊２５号潜水艦に積んだ飛行機でアメリカ本土を空襲した人を知っている。一緒の部隊だった」と、話を聞いた。

前島先輩は１００１海軍航空隊へ昭和二十年の初めころ配属された。三月ころ藤田信雄大尉と始めて話を交わした。米国本土初空襲の高名は既に知っていたという。私に渡されたのは『１００１空、戦友会会報』第３０号平成十年十一月一日発行の小冊子だ。血みどろの苦しい負け戦を、必死で戦い抜いてこられた先輩たちが、敗戦後五十年以上も堅い絆で結ばれているのだ。胸に熱いものを感じると同時に、その冊子を捧げて伏し拝みたくなった。

１００１航空隊は日米戦争の風雲急を告げる昭和十八年七月、千葉県木更津海軍基地に開設された。主な任務は前線部隊の行動に必要な機材・兵器の補給、人員の輸送幷に元フィリピン・ラウレル大統領はじめ重要人物の救出、本土に来襲する敵機の防衛等、多岐に亘る特殊部隊であった。昭和二十年八月末には千歳空港から、決死の切込み隊員を乗せサイパン・グァム島へ、攻撃を仕掛ける予定の特殊飛行部隊もあった。前島先輩は敗戦の日がもう少し遅れていたら、玉砕してしまうことになる。

昭和二十年五月のことである。前島先輩は三重県の鈴鹿飛行場から、千歳飛行場へ一式陸上攻撃機（通称葉巻）の輸送を命じられた。福島県の阿武隈山地に来た時グラマン戦闘機の攻撃を受け、左エンジンがやられた。片肺飛行で辛うじて仙台飛行場に緊急着陸し、転がるように脱出した時、機体が火だるまになったという。そのころの日本本土の制空権はアメリカ空軍に抑えられていたのだ。

アメリカ本土爆撃の記事

藤田信雄氏の遺稿「アメリカ本土爆撃」と、東郷会顧問福地誠夫氏の記事「爆撃の跡に育った友情の樹」から、逞しい男の生きざまと、人間愛に満ち溢れた男の優しさに心酔した。以下、その抜粋である。

藤田氏は明治四十四年生まれ、昭和七年海軍入隊、霞ヶ浦海軍航空隊水上機操縦過程を終了した。昭和十七年に海軍中尉、伊２５号潜水艦の飛行長であった。

同年八月初旬、藤田中尉は軍令部へ出頭を命じられた。潜水艦主務部員の井浦中佐から「今度の作戦は、君の飛行機でアメリカ本土爆撃だ」と言われた。嬉しさに興奮して爆撃目標を軍港か、シャトルの航空機工場と想定した。ところが、背広姿の士官らしい紳士を紹介され「以前アメリカに駐在の方」と言う。紳士が「爆撃目標は西海岸の山林」と話す。「西海岸は山林が多く、一度火災になると消火が困難だ。州政府も住民も山火事を非常に恐れている。焼夷弾を投下すれば効果は大きい」。と地図を広げて詳しい説明をして、その地図を渡された。井浦中佐は零式水上偵察機に三十キロ焼夷弾を搭載するよう指示した。焼夷弾は炸裂すると百メートル四方に飛散し、千五百度で三十秒間燃える。

昭和十七年八月十五日、横須賀軍港を伊２５号潜水艦は勇躍出撃した。十数日の航海でアメリカ西海岸へ接近すると、昼間潜航し夜間には浮上して更に大陸に接近した。九月の米西海岸は荒模様で一週間ほど待った。九月九日、漸く海上の平穏を確認した艦長田上明次中佐が発艦命令を下した。黎明の空に星が煌めき、寒さを感じる艦上に熱気を帯びた隊員が迅速に機体を組み立てた。再び生きて還れない覚悟の私と、奥田省二兵曹が機体に乗り込んだ。エンジン全開、カタパルトから射出された。

厳しい見張りを続け、ブランコ岬上空に達した時の高度は三千メートルだった。山の背から真っ赤なホウズキのような太陽が昇ってきた。鬱蒼とした大森林の谷間は薄いベールがかかったように見える。爆音のみが快く聞こえて、嵐の前の静けさのようである。約三十分後、深い樹木のオレゴンの山の上空から第一弾を投下した。ピカッと発火して四方に飛び散り、森林に火災が起きた。これで四月十八日のドゥーリトル空襲の返礼ができた、と満足感で一杯になった。更に進路を東に数カイリ飛び第二弾を投下した。またもや爆発が起き、目が眩むような白い花火が飛び散った。大成功だ。機首をブランコ岬に向けた。奥田兵曹が「燃えているようです」という。「そうか、よかった。見張りを厳重に」と。暫くして機首を下げ、洋上で待っていてくれた伊２５号潜水艦の傍に無事着水した。

二回目の攻撃は二十日後の二十九日の真夜中だった。月齢が十三夜の明るい夜だったが、帰投時、潜水艦を中々発見できず苦労の末、漸く見つけて着水し収揚された。

三回目の出撃は取りやめになった、と藤田氏ではなく東郷会顧問の福地氏が書いておられる。

それは、伊２５号潜水艦の所在を嗅ぎ付けられたらしい、と田上艦長の判断だったという。

敗戦後、爆撃の跡を飛ぶ

敗戦後のことである。米国テキサス州のアドミラル・ニミッツセンターに、ニミッツ提督が終生恩師として崇敬していた東郷元帥の、記念施設を造りたいとの要請が東郷会にあった。東郷会の旧海軍の有志が日本間の書斎と石庭を贈った。日米両国海軍軍人は昨日の敵は今日の友と親しい交友が続いた。ニミッツセンターの世話人ダグラス・ハバード氏からの便りに依り、藤田氏に係る誠に心温まる話を東郷会顧問の福地氏が知ったという。

アメリカ本土を空爆した藤田信雄氏は敗戦後、自分が投下した焼夷弾で森林はどのようになったか、お気の毒なことをしたと思っていた。実際には湿気が多く森林火災は起きなかったという。藤田氏はブルッキングス市を訪れて遺憾の意を伝え、償いの一端にと幾許かの寄付をするなど色々務めたので、彼の地では藤田氏の真情を快く受け入れ、親交が続き幾度もブルッキングス市を訪れていた。藤田氏は数人の学生に航空券を送り、ゲストとして日本に招き親しくもてなした話もある。

「藤田氏がブルッキングス空港で、ピーチクラフト・ポザンナから降りた時、歓喜の情を抑え難く手を叩いて呵々（かか）と大笑、大声でウォーッと叫んだ」これは空港での出会いの描写である。藤田氏はこのとき八十四歳だった。とすると平成八年（１９９６）のできごとか。

この折に、当地にお住まいの、嘗ては敵味方であった米空軍飛行士Ｇ・ウッドライン氏が、大戦中の焼夷弾爆撃飛行を再現させてくれた。離陸や着陸などは彼が操縦したが、藤田氏が焼夷弾を投下した山林での操縦桿を、藤田氏に託された。

-藤田氏は戦時中空爆の時に、携えていた家傳の日本刀を同市に寄贈した。市は新しく建設した図書館に展示して市民に公開した。

米国西海岸の森林火災の件で新聞記事を思い出した。風船爆弾を日本から飛ばせて偏西風に乗せ、米国西海岸の森林地帯に到達させる計画をして、実際に実行された。和紙で作った風船爆弾は乾燥期の森林地帯に達して予定の森林火災の成果を上げた。ところが、絹布で制作した風船爆弾を、より高度で安定した風船と過信して発信機を付けて飛ばした。絹布の風船爆弾は、途中の海に落ち米国西海岸森林まで届かなかった。日本軍はこの成功・不成功の事実を大戦中には知らなかったと書いてあった。

昭和十七年八月、藤田中尉が軍令部で背広姿の男から聞いた話に、いつが乾期で、いつが雨期だとは知らされていない。生憎雨期の九月に焼夷弾攻撃をしたが、森林火災とならなかった。以上、日本軍の情報収集の幼稚さを知らされた。

藤田氏は平成十年（１９９８）九月三十日、肺ガンのため八十六歳で亡くなられた。藤田氏と一緒に米国本土を爆撃した奥田省二氏は、大戦中に戦死されたとのことである。

平成二十年（２００８）、前島先輩の話に依ると「１００１航空隊戦友会」は、敗戦後六十三年も過ぎると、さすがに生存者が少なくなり、年齢的に維持することが困難となり解散したとのことである。

ドゥーリトル空襲の搭乗員、中国大陸で日本軍の捕虜となった八名の内、最後の生存者ロバート・ハイトさんが、三月二十九日心不全のためテネシー州で死去と書いてある（毎日新聞、2015 年 4 月 2 日）29 ページ。

まだ追加記事がある。毎日新聞 2017 年 4 月 17 日夕刊 9 ページ。百一歳のリチャードコールさんのお元気な写真である。七十五年前の昭和十七年四月十八日、空母から発進した陸軍爆撃機 B―25 の搭乗員であった。元共同通信社ワシントン支局長松尾文夫氏（83）は、その爆撃の日小学三年生で低空飛行の爆撃機とパイロットの顔を記憶していた。お二人が最初に出会ったのが 2005 年である。掲載写真は今年の三月下旬再会したのもの。オバマ大統領が広島平和公園で献花した。安倍総理がハワイ真珠湾で慰霊した。だからもう一度、会いたかったと言う。

前島先輩は平成三十年四月十七日お亡くなりになった。